

# 山城町の漆掻き（その一）

歳 森 茂

## 1 はじめに

漆を掻く人を漆掻き<sup>1)</sup>といい、古くは「カキコ」ともいった。又、漆を掻く作業も漆掻きである。本文ではこの両方を含めることとし、人を指す場合は漆掻師<sup>2)</sup>又は単に掻師と表現することにした。

英語で漆を japan といい、漆工を japanner という。そして、日本における漆利用の歴史は縄文時代にまでさかのぼることができるといわれる。

さて、徳島県の漆掻きの歴史はいつごろから始まったかはまだはっきりしていないようである。延喜式巻 24(905年編集, 967年施行)<sup>3)</sup>によれば、中男<sup>4)</sup>作物として漆を納めたのは、上総、美濃、上野、越前、能登、越中、越後、丹波、丹後、但馬、因幡、備中、備後、筑前、筑後及び豊後の 16カ国(ただし美濃は<sup>4)</sup>金漆)であって、阿波国は含まれていない。当時既にあったかも知れないし、なかったかも知れない。現在、最も記録的に古いと思われるのは鎌倉時代であり、「阿波国徴古雑抄」には、元亨元年(1321)麻植山で守護職から差遣された漆掻役人が官命を笠に<sup>5)</sup>着て百姓と紛争を起したことが記載されている。

降りて、明治 10 年には、徳島県の漆生産量は全国第 6 位を示すことが記録されている(表 1)<sup>6)</sup>。江戸時代から明治・大正期までは、全国に声名をはせたといわれる美馬郡半田町の半田漆器<sup>7)</sup>があり、県内各地で掻師が活躍した模様であるが、掻師の数・消長についての明細ははっきりしていない。そして、昭和 56 年には、わずか 44 キロの生産にとどまっている(表 2)<sup>8)</sup>。

さて、山城町(ヤマシロチョウ)は徳島県南部の高知県、愛媛県と接する県境の町であって、現在、四国で唯一の漆液生産地帯である。東西 6.3~9.2 キロ、南北 14.2~18.0 キロ、矩形に近い形であり、山地と溪流が多く、北は池田町に、

表1 国別漆汁産出量（明治10年）

（単位：斤）

|    |        |    |        |
|----|--------|----|--------|
| 大和 | 43,476 | 越中 | 555    |
| 陸奥 | 5,077  | 紀井 | 438    |
| 越後 | 4,732  | 伊予 | 190    |
| 岩代 | 4,633  | 陸中 | 188    |
| 能登 | 4,627  | 丹波 | 171    |
| 阿波 | 4,166  | 備後 | 139    |
| 三河 | 4,148  | 伊勢 | 109    |
| 羽前 | 3,411  | 陸前 | 63     |
| 越前 | 2,683  | 美作 | 39     |
| 羽後 | 2,150  | 但馬 | 34     |
| 磐城 | 1,813  | 因幡 | 21     |
| 備中 | 801    | 伊賀 | 3      |
| 美濃 | 710    |    |        |
| 加賀 | 599    |    |        |
| 飛騨 | 565    | 計  | 99,246 |

注、明治10年『農産表』による

表2 県別生うるし生産の状況（昭和56年度）

（単位：kg、ha）

| 県  | 生産量     | 面積   | 県  | 生産量     | 面積    |
|----|---------|------|----|---------|-------|
| 岩手 | 4,670.0 | 80.5 | 愛知 | 20.0    | 0.2   |
| 茨城 | 1,015.0 | 31.0 | 福井 | 8.0     | 3.0   |
| 山形 | 152.0   | 13.5 | 福島 | 4.8     | 49.6  |
| 新潟 | 141.0   | 43.0 | 島根 | 1.0     | 0.1   |
| 長野 | 91.0    | 60.0 | 岐阜 | 0.0     | 28.6  |
| 青森 | 80.0    | 39.4 | 京都 | —       | 2.7   |
| 岡山 | 77.0    | 11.6 | 秋田 | —       | 2.4   |
| 石川 | 57.0    | 75.0 |    |         |       |
| 徳島 | 44.0    | 1.0  |    |         |       |
| 栃木 | 30.0    | 4.0  | 計  | 6,390.8 | 445.6 |

注、林野庁林産課：特用林産物需給表による

南は高知県大豊町（オオトヨチョウ）に、西は愛媛県新宮村（シングウムラ）に、東は池田町及び西祖谷山村に、それぞれ接している。東の境に吉野川の本流が流れ、西祖谷山村と接する部分に大歩危、小歩危の絶景が存在する。

面積は 131.57 km<sup>2</sup><sup>9)</sup>で、林野が多く、人口は 7,390 人(1983 年現在)である。吉野川の支流の一つである銅山川（ドーザンガワ）が新宮村を通して本町の北部を貫流している(図 1 参照)。この銅山川流域地帯が漆の里であり、現在わずかに二名に減少した掻師が活躍する。

本報告は、最初、阿波漆の解明をめざしたが、資料が乏しいため、その主産地であった山城町に限定し、漆掻きの調査・取材を行ったので、その実態・特徴の概略を報告するものである。

## 2 漆の里

山城町の気候特色について、山城谷村史は、<sup>10)</sup>「大体において、本村の気温は池田より低く、西祖谷にくらべて高温であり、又、雨雪の量は、全県的にみて少量である」と述べている。山城町大野における降水量は、表 3 の<sup>11)</sup>ようであり、

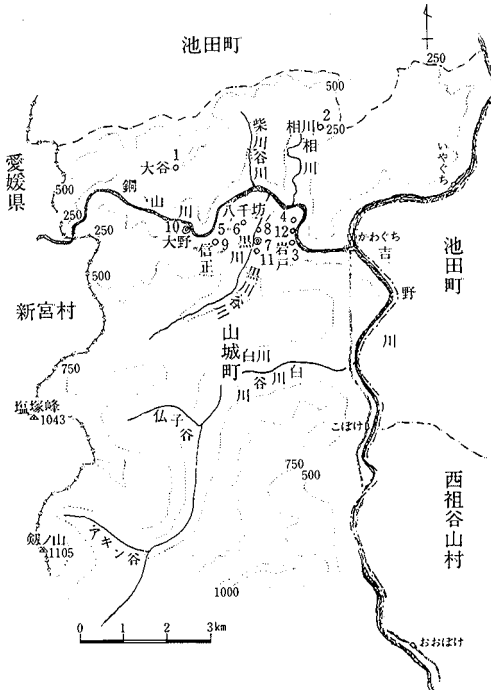


図 1 山城町における現及び旧漆掻師の住居位置 (No.をつけたうち◎は現、○は旧である)

表3 山城町大野の降水量 (単位:mm)

|      | 1     | 2    | 3     | 4     | 5     | 6     | 7     | 8     | 9     | 10    | 11    | 12   | 計       |
|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|---------|
| 昭13* | 33.5  | 37.7 | 96.7  | 102.2 | ----- | ----- | 257.7 | 168.1 | 128.0 | 75.1  | 162.8 | 92.6 | -----   |
| 25*  | 198.5 | 72.5 | 67.2  | 108.3 | 119.3 | 169.0 | 236.7 | 132.9 | 362.7 | 157.5 | 113.1 | 79.9 | 1,817.6 |
| 57   | 92.7  | 59.5 | 109.5 | 149.2 | 85.6  | 120.5 | 268.0 | 309.8 | 273.7 | 39.1  | 163.8 | 51.7 | 1,723.1 |
| 58   | 38.0  | 49.8 | 169.0 | 124.6 | 245.9 | 108.1 | 116.1 | 91.5  | 529.0 | 62.0  | 48.3  | 72.3 | 1,654.6 |
| 59   | 37.6  | 35.1 | 54.4  | 111.3 | 71.2  | 250.0 | 136.8 | 244.4 | 102.0 | 57.5  | 36.0  | 51.9 | 1,188.2 |

注、建設省四国地方建設局徳島工事事務所測定資料。ただし\*は山場合村史p.39によるもので位置不明

1,000ミリ代にとどまっている。

気象台による山城町の気象観測は、昭和26年から廃止されているが、山城谷村史に載っている山城気象観測所による積雪最大量をみると、21年(11.2cm)、22年(20cm)、23年(3.5cm)、25年(23cm)であり、積雪量は多くない。掻師の一人である西田雪雄氏は58年に70cmぐらい降ったが1m以上も積った記憶はないと述べている。記録・調査によれば<sup>12)</sup>、漆は積雪による折損被害が他の樹種より大きいようで、多雪地は漆栽培に不利とされている。

さて、銅山川流域の気候で何か特徴があるであろうか。山城町とは別個に、備中漆の産地である岡山県備中町へ依頼して備中町史(抄)や、同町の漆地帯の地図を入手したが、地理的に成羽川流域と極めて似ているように思われた。又、備中町史によれば、「朝霧のまく谷の漆は質がよいのだといわれるが、ダムで水没した地域が、いろいろの条件から一番多量に、良質のものを出した」と記載されている。徳島地方気象台の話では、銅山川流域は山陰のような気候だという。大豊町出身で、父が漆を掻いたこともあるというS氏は、あそこはガスがよくかかる地帯であるという。前記の西田氏は「八合霧」といって昔から著名であるという。どうやら、良好な漆の里は似たような気象条件が存在しているように思われる。

表4に山城町の漆生産の推移を載せたが、この表によって、かつての隆盛さを偲ぶことができる。それが現在は、掻師は、前記の西田雪雄氏(61才)と渡瀬秀雄氏(66才)の二人を残すのみである。

さて、西田氏の尽力(旧漆掻師への問い合わせ等)によって、山城町における

表4 山城町産出生漆生産表（単位：本、戸、貫）

| 年度    | 樹数     | 製造戸数 | 正味(幹掻) | (枝 掻) | 雑液 |
|-------|--------|------|--------|-------|----|
| 明治初期  | —      | —    | 300    | —     | —  |
| 18年   | 36,000 | 30   | 230    | 45    | 8  |
| 19年   | 45,000 | 28   | 230    | 45    | 6  |
| 34年   | 10,100 | 28   | 120    | 3     | 1  |
| 44年   | —      | —    | 200    | —     | —  |
| 大正4年  | —      | —    | 178    | —     | —  |
| 昭和10年 | —      | —    | 25     | —     | —  |
| 15年   | —      | 45   | 100    | —     | —  |
| 25年   | —      | —    | 160    | —     | —  |
| 27年   | —      | 17   | 110    | —     | —  |
| 49年   | —      | 1    | 16     | —     | —  |

注、半田町史、下巻（1981）、漆器と漆液の生産、p.256、資料30による。

表5 山城町における旧漆掻師の経験年数、掻いた期間及び後継者の職業

| No. (氏名) | 経験年数              | 掻いた期間              | 後継者の職業  |
|----------|-------------------|--------------------|---------|
| 1 (清水)   | 約10年              | 大正6～昭28ごろ          | 農業      |
| 2 (藤橋)   | 約45年              | 大正7～昭35ごろ          | 公務員     |
| 3 (藤井)   | 約25年              | 昭和初～30ごろ           | 農業      |
| 4 (大谷)   | 約5年               | 昭23～30ごろ           | 転出      |
| 5・6 (丸浦) | 親：約40年<br>息子：約20年 | ～大正7ごろ<br>昭23～39ごろ | 農業      |
| 8 (窪田)   | 約6年               | 昭23～32ごろ           | 大阪で工場勤務 |
| 9 (尾脇)   | 約40年              | 大正7～昭35ごろ          | 自由業(土木) |
| 11 (中本)  | 約30年              | 大正終～昭30ごろ          | 転出(養子)  |
| 12 (多利)  | 約30年              | 大正6～昭30ごろ          |         |

注、間で休む年もあるので、経験年数と掻いた期間は一致しない。

現在及び近い過去の漆掻師の住居位置を地図上に図示した。それが図1である。これでみられるように、銅山河流域、しかも川の南側に集中していることが分かる。図中、◎の7は黒川の渡瀬氏、◎の10は大野の西田氏である。○は漆掻きをやめた家である。これには、ご本人が職業転換した場合と、ご本人の老衰又は死亡の後、後継者がいない場合とがある。そして、その概要は表5に示した。これによると、プロとして漆を掻いていたのは、大正期以後をみれば、現在の現役を含む11軒だけのようである。そして、遅くとも昭和39年ごろまでに9

軒が徹退し、2軒が残ったという経過を示す。銅山川周辺だけでなく、山城町の中部や南部にも、漆を掻く人が居てもよさそうであるが、それは居なかったそうである。掻ける漆の樹（これを土地の人は漆の原木という）は中部や南部にも存在するが、プロの人達はすべて銅山川の周辺に住居を構えていることは、一つの特徴であろう。

### 3 用具とその特徴

#### 1) ウルシガマ

図2、写真1に示したもので、西田氏は昭和34年、福井県今立郡今立町宇野五郎左衛門氏宅へ泊りこんで、ウルジガマ3丁とウルシガナ約30丁を打ってもらったという。2本のうち薄くなっているほうは約20年使ったもので、刃幅1.60、厚いほうは6～7年使ったもので、刃幅2.61である。新しいほうの重量は188g、全長は古いほうが38.2、新しいほうが40.8（いずれもcm、以下省略）である。

粗皮落しに使うが、ここでは「こけおとし」という。こけおとしをしないと「てぶれこぶれ（方言）」があって、掻いて浸出した液がとりにくい。漆樹が4本ぐらいかたまってあるときは一度にこけおとしをしておくが、樹間隔が15mぐらい開いているときは、こけおとし、かな入れ（ウルシガナで掻くこと）をしてから次に進むという。

#### 2) ウルシガナ

ウルシカナともいい、カキガマのことで、写真2の左側がそれである。漆掻き用具を打つのは特殊技能を要するといわれ、前記の宇野氏が一手に作っていたため、その死亡後はどこの生産者もその補給に困っている。西田氏は後3本を残すのみという。今使っているのは、使い始めて13～14年になるという。カネ長5.50、柄はカシで柄長14.82である。山へ行くときはスベアを持参し、研ぐときは普通の砥石では研げないので、合うような小さいのを使って研ぐという。

#### 3) ヘラ (1)

写真2右側であり、カキベラのことを単にヘラといっている。輪島では銅を

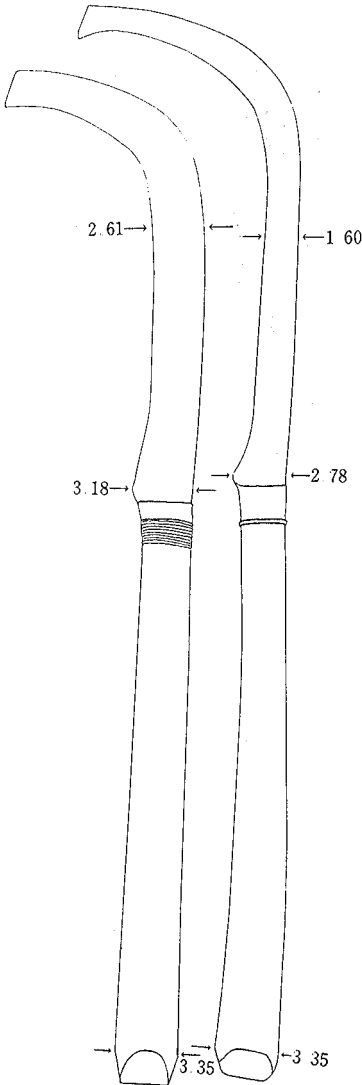


図2 ウルシガマ

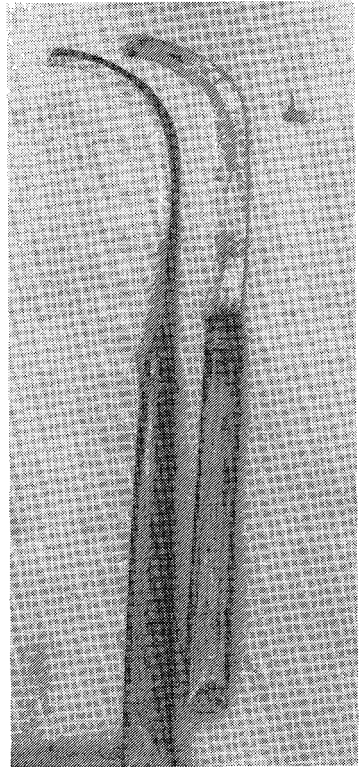


写真1 ウルシガマ

全長は左より  
38.2、40.8

使うというが、ここでは火箸をカナ切りで切り、叩いて伸ばし、先端はペンチで曲げている。柄はカシであり、約30年使っているという。ヘラ部分7.08、全長20.70である。

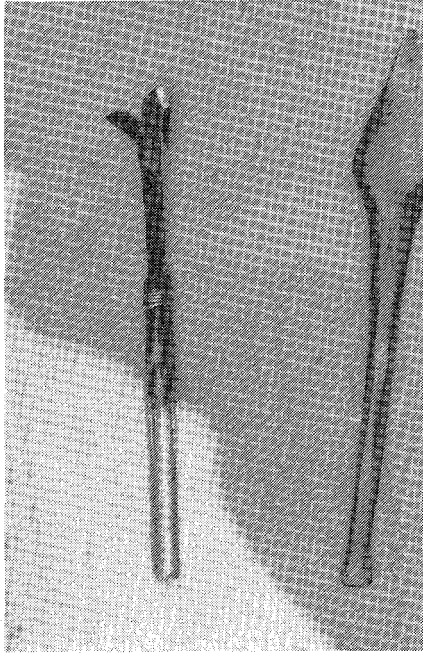


写真2 ウルシガナとヘラ

#### 4) ウルシツツ

掻きとった漆液を入れる容器をウルシツツ（写真3）といい、軽いほうがよく、モーソーチクは重いので使わない。まず、当年生のマダケを10月末か11月初めに切る。竹の真中付近の約20cmを切りとり、3時間ハガマで煮て乾燥させる。底部には杉板を下よりはめこみ、竹釘3本を打って止め、漆を塗りつけて漏れを防ぐ。竹の節をそのまま利用すれば、底が平らでないので液を掻き出すときに困る。断面の直径8.4~8.8、高さ20.0前後。重量は50匁(188g)~60匁(225g)、漆の容量は170~200匁。しかし昨今は一日に100匁(375g)取るのは困難なくらいであるという。ウルシツツは作業中はフタをしない。帰るときは液の上にフタガミ（楮原料の紙にカキシブを塗ったもの）を載せ、その上にフチワをし、さらにその上に、口にフタ紙を3枚ぐらいかぶせて、きちんと止める。それを腰にぶら下げ、単車で走って帰るという。



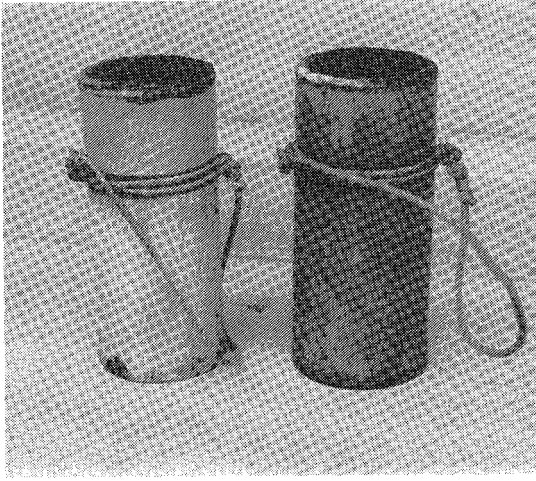


写真3 ウルシツツ

西吉野村の資料によれば、同地の<sup>13)</sup>ゴウも断面の直径 8.3 cm、高さ 17 cmで、ほぼ同じ大きさのようである。

#### 5) ヘラ (2)

図3に示したヒノキの薄板であるが、これもヘラという。このヘラは毎日帰ってから、ウルシツツからウルシオケに移した後に、フタ紙と液が密着するようにするためにヘラを使う。間に空気が含まれると漆が黒くなる。又、オケからオケへ移し替えるときにも使う。これは図に示すように先端は特に薄くなっている。100年以上経過した古材から作るが、若い材では油や漆を吸いすぎるといわれる。毎日、使い終わったら、ヘラに着いている漆を布でふきとり、亜麻仁油に3 cmぐらいつけておく。そうすると上まで吸い上げる。全長 28.7、先端に穴があるのはここを釘で止め、板にカンナをかけるためという。

#### 6) ウルシオケ

木製と紙製<sup>14)</sup>がある。木製のは貫オケ、2貫オケ、5貫オケ(写真4)がある。大きさはそれぞれ、22.3×19.5、26.2×26.7、32.7×37.8 (いずれも外径×高さ)であり、断面は正円でない。これらは大阪や高松の漆器商や間屋からもらったといい、現在でも使用されている。紙製(写真5)は22.1×16.2で、4キロ

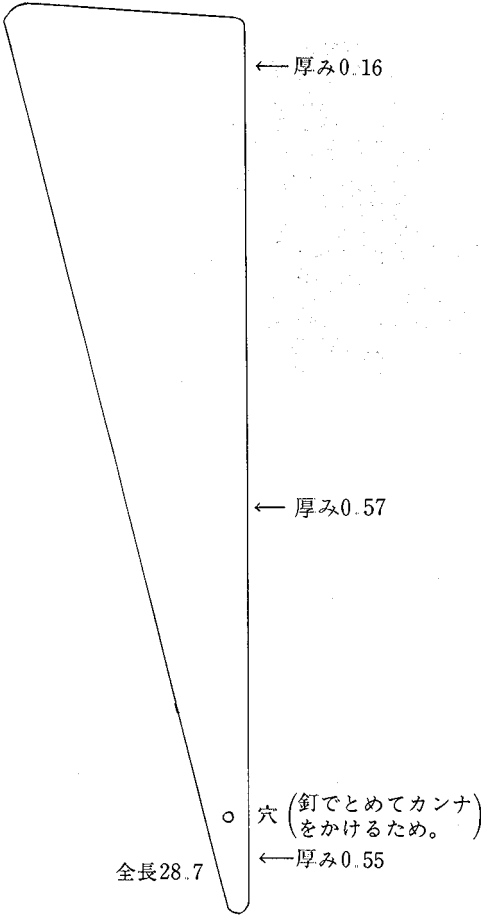


図3 ヘラ(2)

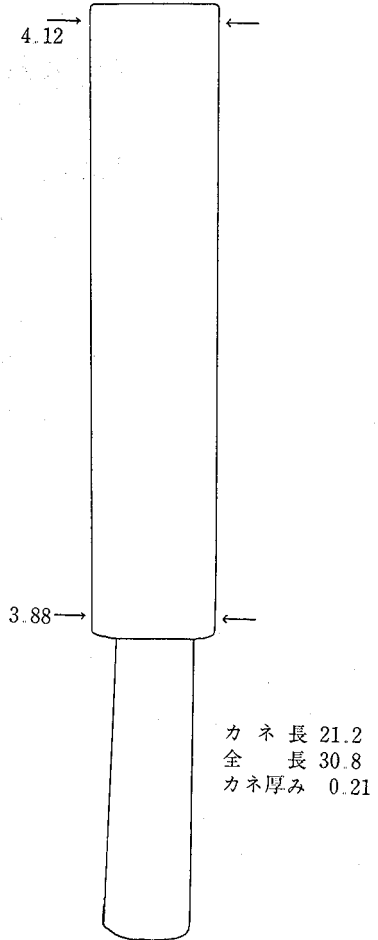


図4 ツツクリ

入りであるが、1貫匁(3.75キロ)きっちり入れるという。紙製のは、まれに漏れることがあるという。

漆はナマグライところを好むといい、写真6のようにフタ紙をきちんと処理して、うす暗い倉庫へ保管する。西田氏の倉庫は母屋と裏の栗園の陰になり、直射光は少なく、うす暗いが、多湿なことではなく、倉庫内にカビが生えることはないという。



写真4 左より2貫オケと5貫オケ

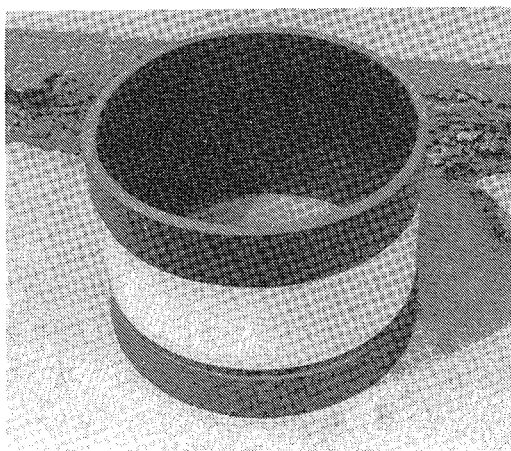


写真5 紙製漆入れ容器（4キロ）

## 7) ツツクリ

ウルシヅツの液を移すのに使うもので(図4), しっかりしたノコギリの身部分を切って作ってあるので, 肉は厚く(0.21), 耐久的で, 西田氏は昭和23年から使っているという。カネ長21.2, 全長30.8, 図の向って右側が包丁のよう



写真6 漆液の保存状態

にごく鈍い刃がついている。

#### 8) 用具と用語の特徴

漆掻き用具は全国的に、ほとんど同じものが使われているというが、微細に観察すれば異なる点もある。表6は漆の主要産地又は旧産地における主要用具の名称を調べたものである。このうち、ウルシツボについてみると、岩手県浄法寺町、宮城県鳴子町、輪島市等ではホウの樹皮を使って作られるのに対し、奈良県西吉野村と徳島県山城町では竹が材料である。岡山県備中町ではホウの樹皮も使ったが、ヤマガキのほうが適しているとしてヤマガキを使っている。吉野の漆掻きは表1に示すように、かつては極めて盛んであったが、昭和初期ごろまでしか行われず絶滅の形である。したがって、竹をウルシツボに使用しているのは徳島県だけのようである。西吉野村の項にあるゴウ（盒）とは竹の筒<sup>13)</sup>のことであるが、左端の官庁指導用語の一つに、「ゴウグリ」というのがあり、岡山県備中町でもゴウグリの言葉を使っている。かつて隆盛であった吉野漆の影響かも知れない。この表でみると、徳島県の用語は独特である。他に使われていない用語としては、ウルシガマ、ウルシカナ（又はウルシガナ）、ツツクリ、ハツカナ、ニバンカナなどがある。ウルシヅツは岡山県で使われている。ウル

表6 漆掻きに関する用具・用語の地方名称

| 官庁指導用語 <sup>1)</sup> | 漆樹栽培書(初瀬川健増) <sup>2)</sup> | 岩手県浄法寺町 <sup>3)</sup>   | 宮城県鳴子町 <sup>4)</sup> | 輪島市 <sup>5)</sup> | 奈良県西吉野村 <sup>6)</sup>  | 岡山県備中町 <sup>7)</sup>            | 徳島県山城町 <sup>8)</sup> |
|----------------------|----------------------------|-------------------------|----------------------|-------------------|------------------------|---------------------------------|----------------------|
| カワムキ<br>カマ           | カワハギ                       | カワハギ<br>ガマ              | カワケズ<br>リガマ          | コシガマ              | アラカワ<br>トリ             | カワハギ<br>カワムギ                    | ウルシガマ                |
| ウルシカ<br>キカマ          | カキガマ<br>カンナ                | カキガマ                    | カキガマ                 | ミキリガ<br>マ         | ウルシガ<br>ンナ             | ウルシカ<br>ンナ<br>カンナ               | ウルシカナ<br>ウルシガナ       |
| カキペラ                 | カキペラ                       | カキペラ<br>ヘラ              | トリペラ                 | トリペラ              | トリペラ                   | ウルシペ<br>ラ<br>カキペラ<br>トリペラ<br>ヘラ | ヘラ                   |
| ウルシツ<br>ボ            | ウルシツ<br>ボ                  | ウルシツ<br>ボ<br>カキタル<br>オケ | ウルシツ<br>ボ<br>カキタル    | ウルシツ<br>ソ<br>ツ    | ゴウ                     | 手筒<br>ウルシツ<br>ツ<br>ツ            | ウルシツツ                |
| エグリ                  | エグリ                        | エグリガ<br>マ               | グリ                   | エグリ               |                        |                                 | (なし)                 |
| ゴーグリ                 | ゴグリ                        | ゴグリ                     |                      | 若ガマ<br>ハツガマ       | クリペラ                   | 筒グリ<br>ゴウグリ                     | ツツクリ                 |
|                      | 辺付け<br>ハツカマ                | メタテ<br>ケンツケ             |                      |                   | ハツガマ                   | ハツカマ<br>カマツケ                    | ハツカナ                 |
|                      | 二鎌                         | 二品<br>アニヤマ              |                      | ニバンガ<br>キ<br>二辺付  | ニバンガ<br>キ<br>ニバンガ<br>マ | ニバンガ<br>マ                       | ニバンカナ                |
|                      | 目立の間<br>隔                  | 1尺2寸                    |                      | 約37cm             |                        | 1尺5寸                            | 1尺5寸                 |

注、1) 伊藤清三氏は昭和10年代より官庁指導用語なるものを作り、官庁の文書あるいは簡易指導パンフレット、講習などに用いてきたという。(漆文化、1979、No.22)。

2) 明治22年に執筆された当時の大指導者、初瀬川健増氏は会津出身であるので、本書の用語は会津の用語とも考えられる。

3) 柳橋真、1985、日本民俗文化大系13、技術と民俗(上)、148—150などによる。

4) 鳴子町の漆芸家の伊藤勝英氏による。

5) 輪島市の掻師の宿谷一政氏による。

6) 賀名生村史(1959)及び河岡武春、1985、日本民俗文化大系13、技術と民俗(上)、151—153による。

7) 備中町史(1970)及び掻師の村上与志光氏による。

8) 掻師の西田雪雄、渡瀬秀雄両氏による。

シガマを対象とすると、他地方では用語の中に目的・用途を含めてある。即ち、カワハギ、カワケズリ、アラカワトリ等である。「ウルシガマ」だけでは何に使うのか判然としない。「ウルシカナ」でもそうである。「ガナ」又は「カナ」は「カンナ」と同意であると思われるが、これもはっきりしない。その点、カキガマ、ミキリガマは分り易い。ヘラも二種類あるが、何れも単に「ヘラ」としかいわない。これも区別のある名称がついてよいことである。ハツガマをハツカナというが、ウルシカナを入れる最初であるから、ハツカナとなり、二番目に入れるときはニバンカナとなっている。以上のようにみても、徳島県の漆掻き用具等の用語は全国的にみて独特であり、又、分かりにくいということがいえるようである。次に、他地方とのつながりをみると、吉野（ウルシガンナ）……備中（ウルシカンナ）……山城町（ウルシカナ）、備中（ヘラ）……山城町（ヘラ）、備中（ウルシツツ）……山城町（ウルシツツ）、備中（筒グリ）……山城町（ツツクリ）などがあり、記録上では吉野や備中との技術交流は見当らないが、言葉の関連のあるのは面白く、今後の解明をまつ次第である。

#### 4 漆の栽培上の特色と良系統

漆の栽培方法・指針などは、一般に、岩手、福島、石川等の主産地を中心に書かれており、西日本については言及されていない。したがって、多少くちがう点も出てくる。例を挙げれば「漆は肥沃な土壌を好む陽樹なので、日当たりが良く、風通しの良い、水の停滞することのない砂礫壤土を選び、日陰地や湿地、山の峰をさける<sup>15)</sup>」とか、「漆は陽光の要求度も極めて高い<sup>16)</sup>（アンダーラインは筆者がつけた）とあるが、山城町などでは漆樹は山を背にした北向きの斜面（土地の人はこれをカゲという）によく生育するようである。漆を掻いているときでも、日中の陽光の強い時間帯には、漆液の浸出量が減ってくるという。漆も日中はせこいのだろう（「せこい」とは阿波方言で「しんどい」こと）と西田さんはいう。前記のS氏は、高知県の穴内では北向きの斜面に多いという。図1に示したように、掻師の住居位置はほとんどこのカゲにある（標高は200～250 m）ということは、周辺の斜面が漆の栽培に適しているということであり、西田、渡瀬両氏は自宅周辺に漆を植え育てている。又、西田氏が59年に

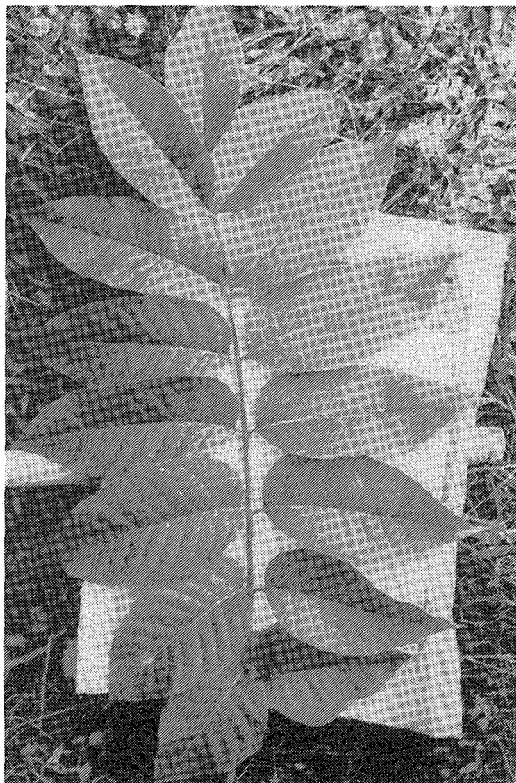


写真7 漆の良系統  
(小葉は7対)

掻いた四日山は、いずれも標高250～300mの範囲にあり、半田町で掻いた経験をもつ漆芸家もその程度の高さであることを認めている。したがって、「漆は人里近いものである」といわれるが、少なくとも標高500m以下の半日陰地が適地であると認めてよい。又、山城町の大野、黒川いずれも排水のよい黒っぽい有機物に富む土で漆樹の生育はよい。砂質の花崗岩土質はここにはない<sup>17)</sup>。

次に西田氏に、漆の良系統と不良系統を示してもらった(写真7は良系統)が、それは図5のようである。即ち、Aは漆液のよく出る系統で肩が張り、葉はやや細型である。Bはほとんど出ない系統で、<sup>18)</sup>なで肩であり葉形は丸い。<sup>19)</sup>図鑑によれば、漆の小葉には「葉柄及び葉裏の脈上に短毛が生えている」とある。

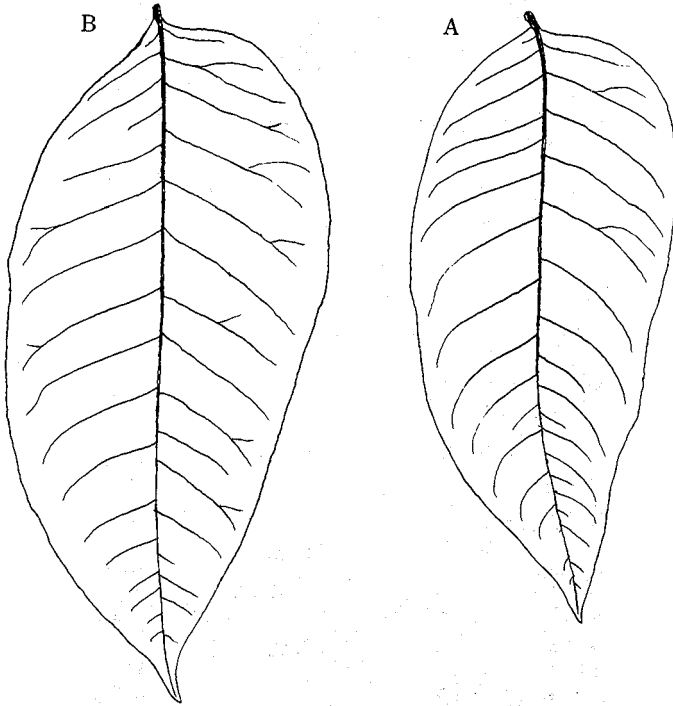


図5 漆の小葉

(Aは良系統, Bは不良系統, いずれも中央部の小葉である)

図のAとBを比較すれば, Aの葉裏の主葉脈上には毛が短く密集しており, Bはやや粗く, 毛はAより長めである。又, 葉柄上の毛はAは密生しているが, Bでは少ない。以上の相違が見られる。又, 木の肌は黒肌がよく出るし, 白肌の美しいのはよく出ないといい, 白肌の葉の丸いのはよくないと西田氏はいう。

殺し掻きの後の原木は原則として切り倒すが, 代りに周辺にタケノコのように漆の芽が出てくる。これを「根上り」又は「メゴ」といい, これを苗として植栽する。山城地方では実生は漆の出が悪いといい伝えられていると西田氏はいう。

## 考 察

本報は漆の里の一つである徳島県山城町の環境や用具, 漆樹の特性などを紹



介したものであるが、こうした山城町に関することはほとんど知られていない。岩手県や輪島などでは漆の植栽が官民挙げて推進されているとき、山城町でも今後、推進を計るべきであり、本報はその一つになり得ると思っている。国産漆は品質がよく、高級品に使われる。ただ、徳島県では工芸品における漆の使用量が少ないため、県内産漆は県外へ出荷されている。工芸を振興し、県内産の使用率を高め、県内産漆に対する関心を高める必要がある。次に実生の問題がある。4項で述べたように、実生は山城地方では漆の出が悪いといい伝えられていて使用しない。一方、香川県では浄法寺系の実生苗を育てているところもある。実生でもいけるのかどうか、早く検討すべきであろう。なお、掻師の生活や掻き方の特徴などは次回にゆずりたい。

**謝辞** 本調査及び本稿作成に当り、伊藤勝英，稲田道彦，太田壽，佐野正茂，柴田昭二，田尾善一，竹内久雄，田中正朋，西田雪雄，別所将義，村上与志光，渡瀬秀雄，綿谷正則（50音順・敬称略）の皆様，備中町産業課，徳島地方气象台，建設省四国地建徳島工事事務所を始め大勢の方々の御教示・御協力を得たことを深謝する。

## 要 約

徳島県の山城町（ヤマシロチョウ）は古くから漆の産地として著名であった。漆の里についてみると、吉野川の一支流である銅山川流域（標高200～250m）に集中している。現及び旧掻師達は、その中でも北向き斜面（カゲ）に多く住居を構えている。漆樹は標高500m以下の肥沃な有機物の多い、やや日陰地を好むようである。漆掻用具は全国的にほとんど同じものが使われているが、その名称などは山城町では独特であり、今後のルーツ解明が期待される。そして、他の産地に習って、産業振興のために、漆樹の増植を計るべきである。

## 注及び文献

- 1) 例えば、山口松太氏は、「備中漆について（その1）歴史と消長，漆文化，No.16（1978）

- 23頁」において、『元禄8年(1695)に鳥取県八頭郡佐治村の組頭から庄屋あてに「佐治谷ではこれまで根分法で植樹していたが、吉野の漆掻きに実生法の指導を受けたいのだからこれを招いて欲しい」という内容の願書が残っていると述べており、漆を掻く人を漆掻きというのは一般化している。
- 2) 漆を掻く人を何と表現するかは迷うところである。伊藤清三氏は、「漆文化, No22(1979) 17頁」において、漆掻人という言葉を使っている。又、58年度現代名工の一人として挙げられた岩手県の岩館正二さんは、漆掻き職と記載されており、又、同氏が黄綬褒賞を受けた際には、「漆文化No41(1985) 35頁」には漆かき業となっている。今年5月、高松市三越における岩手県物産展の際に入手した丸三漆器のパンフレットには「漆掻きさん達が……」と表現されていた。岡山県備中町漆生産組合(代表)の村上与志光氏は「当町では掻師の道具は……」と、「掻師」という言葉を使っている。以上をふまえて本報告では漆掻師又は掻師を使うことにした。
- 3) 黒板勝美(1937)：国史大系第26巻，国史大系刊行会，pp.597~622
- 4) 令制で、17~20才の男子に課した租税で、その居住地の産物の定められた量を中央政府に納入した。日本国語大辞典(昭48)による。
- 5) 徳島県郷土文化会館民俗文化財編集委員会(1983)：阿波の木地師，p85
- 6) 岡光夫・佐々木長生(1984)：初瀬川健増「漆樹栽培書(明治22年刊)の解題，p.458による。
- 7) 竹内久雄・姫田道子(1977)：半田漆器の盛衰，あるくみるきく，127，pp.4~32
- 8) 坂 治(1982)：移り変わりゆく「うるし」，漆文化No35，p.26を引用
- 9) 山城町20周年史編集委員会(1979)：山城町二十年史
- 10) 近藤辰郎編，外峯繁市発行(1960)：山城谷村史，p.39
- 11) 徳島工事事務所による測定器の設置位置は信正である。
- 12) 野中一男(1982)：凍害や雪害にかかりやすいウルシの栽培，漆文化No31，pp.10~12
- 13) 奈良県の方言で、竹つつをゴウという。小学館(1974)，日本国語大辞典，7，p.412
- 14) 高松市春日町の熊井紙器が製造元であり、紙製漆入れ容器といい、製造者は全国でもこの他には伊勢に1軒あるだけで、ここからは大阪、京都その他へ出荷しているという。種類は2，4，12，24(キロ)があるが、2キロと4キロが多く使われ、価格は250円と350円という。漆器業者が買って掻師に渡している。
- 15) 坂 治(1983)：移り変わりゆく「うるし」，漆文化No35，p.27
- 16) 野中一男(1982)：凍害や雪害にかかりやすいウルシの栽培，漆文化No31，p.10
- 17) 香川県でも数カ所で漆樹が栽培されているが、山城町より降水量少く、陽光強く、特に土質が有機物の少ない花崗岩質であるため、乾燥して一般に生育は不良である。ただ一つ、三木町鹿庭にある別所将義氏の漆園は、小山の北向き斜面の谷下にある扇状地の畑に栽植されているので、土壌水分が豊富のようであり、生育は順調である。当地方では、北向き斜面、やや日陰地であること、土壌水分の多いことの三条件が必須であるように思われる。
- 18) 押葉にすると、Aでは葉柄より液が出て褐色の固形物が紙に付着するが、Bではごくわず

かである。したがって、一定条件のもとで押葉を比較するのも選別の一方法と思われる。

- 19) 飯沼愆斎・北村四郎（1977）：草木図説，木部（下），p.723によれば「葉柄と葉脈に褐色の短毛を密布する」とあるが，牧野富太郎（1961）：新日本植物図鑑，p.354には「葉柄と葉裏の脈上に短毛が生えている」と書かれている。